

昭和二十四年

(二四八)

合掌 先頃はお便り有難う存じます。

お念仏の中によいお年をとられたことでしょう。旧年中には大発お世話になりました。今年もまたよろしうお願い致します。長年の間ようこそ一貫して御精進下さいました。此上なく有難いことでもあります。善悪を人の上に見るより、御念仏を通して宿業を知らせて頂くことが大事です。宿業と南無阿弥陀仏よりほか何ものもないのであります。お念仏の中に一切を宿業として頂くことができたので、無碍の一道に立たせて頂くことができたことでもあります。しかし時々久遠劫来の我慢が出て来ては頭をもたげますから、油断がなりません。いよへ御念仏申させて頂きましょう。

日寺先生は達者ですか。よろしく云つて下さい。由利ちゃんはどうなりましたか。二月の講習には一日でも御来会なさい。毎日を気をつけて歩んで下さい。御大事に。

昭和二十四年一月二十二日

夜晃

時重せきよ様

(二四九)

合掌 度々お便り有難う。有難くない日にはいよく悪人正機の本願に徹して、お念仏申しなさい。我が心は煩惱の泥田とおもうべし。「泥の中誰が仕業か蓮の花。」よい心はあてにならない。本願の念仏だけが尊いのです。お大事に。

昭和二十四年一月二十四日

(二五〇)

合掌 承りませば貴方様には大変な火傷をなさいましたとのことその後の御経過如何で御座いますか。御苦しいことでしょう。どうか一日も早く御全快下さるよう切念致します。聞きませば御怪我の中にも御念仏申して休んでいて下さるとのこと。誠に有難いことであります。今は御念仏の御礼、大切な御礼です。どうか早く全快下さるよう御願致します。先は御見舞迄早々。

昭和二十四年四月十八日

夜晃

原支部中原 岩見徳一様

(二五二)

合掌 南無阿弥陀仏 幾度も御手紙頂きながら失礼していますので今日は筆を取りました。その後、御元気で一道御精進の御事と存じます。

さて昨年十一月新市で始めて御会い致して今日迄誠によく御精進下さいまして有難く嬉しく存じます。それによりて服部の青年の天地に六字が生きて下さって今日の有様になりました事、誠に如来本願の生み給いし奇蹟であります。しかし問題はこれからであります。常に量より質に、量を得なければなりません。又同時に量を質に転ずる。ほんとうは質より外に量はない。不断に内に内にと培ってほんものになくしてはなりません。せつかく一層の御精進をお願い致します。

最初の御便に(典三〇ノ三四) 御一代聞書二二七章「皆人毎に善き事を……」の章を一生の鏡として「御恩」の二字、大事に頂きましょう。学んでも聞いても光らない人は、我がよき者にはやなりて、その心にて御恩ということは打ち忘れて我が心が本になるが故であります。精進すればするほど御恩が見えて来る筈です。御恩、御恩。唯御恩。

同封はよく御精進下さいましたので御褒美と言うところ。粗末ですが御笑納下さい。御集会の節は御地の御同朋によりしく御伝え下さい。念仏一道を精進致しましょうと。御寺の皆様にもよろしく御伝え下さいませ。私の体は静養させております。悪化してはいませんから御安心下さい。

昭和二十四年四月二十日

夜晃

竹政信行様

(二五二)

合掌十七日付の御手紙二十三日に拝見致しました。弟の病気もはかばかしくなくとのこと心配しています。何とかして全快まで行かずとも、少しでもよくなつてくれたらと念ぜずにはいられません。つる枝さんのみ心の程、お察しすることでありませ。こちらは、母は色々病状が現われていたが、皆よくなりましたから御安心下さい。私も十日間ほど脈がケツタイしていましたが二三日ほどやめています。デキタリスをのまされました。もう少し快くならないと行かれませ。半分床の中です。竹原から浜までが気になります。しかし三月頃よりは元氣になりましたから御心配下さいませ。弟の様子を一週一度位はがきでいいから知らせして下さい。病人ほどいけないものはない。講習後、本部にも三四人流感等で寝ました。誠につる枝さんの御苦勞を思うとたまらない気がします、どうか御念仏申して力強く生きぬいて下さい。

私なりと早く元氣になつてと思わずにはいられませ。わかめが手に入りましたか、まだなら、少し貰いましたから少しでも送りますしうか、其他こちらにあるものているものがあれば絹にまで云って下さい。送りますから。何よりも貴女が元氣で

いて下さることが大事です。あまり無理をせぬように、絹も一度御見舞にゆきたいが、今頃は松中さんは家に帰っていないし、ばばが絹をはなさないのではなかなか出られません。よろしく云つてくれとのこと。先は御返事迄早々。

昭和二十四年四月二十三日

夜晃

つる枝様

(二五三)

合掌 いよ／＼御就職校も決定致しました由、これからです。静かに静かに御出発下さい。念仏を嫌う人はあつても、御念仏から発散するものを嫌う人はない。御念仏を出さずに御念仏申して生ききつて下さい。そして御地方の御同朋の集りを時々して下さい。又早く御会い致しましょう。

昭和二十四年四月二十三日

夜晃

中村正様

(二五四)

合掌 さびしいと言うね、さびしさに徹せよ。それでもさびしければ更にさびしさに徹せよ。力はそのさびしさから生れる。徹し徹して、遂に地上にはその寂しさを救うものなきに徹せよ。何ものかを得れば消える淋しきは、真の寂しさではない。み親の光は寂の中に光る。せつかくの御精進を願う。

昭和二十四年五月十日

夜晃

西岡千頭様

(二五五)

合掌 やれくだ。待たしたのう。次を出そうか。重態ではないか。しかし今日遂に来た。何時もの字である。一目で安心。読んで安心。だが、鶴枝さんが過労で倒れたとのこと、心配でならん。どうか元氣が出るまで休診養生をたのむ。

八十の高齢でカタル性肺炎、四十度だし、ペニシリソで下つたが衰弱がひどく、色々余病が出たりするので、この度は駄目だと思つたが、不思議に全快しました。その他、春の講習の時、流感を持ちこんだものが出て、会員も帰宅後は沢山高熱だったとのこと、本部にも枕を列べてねた。今頃のことだ、まるで世木田医院（玄関先の板

圍の家）へ金の水を流すといをつけておくようである。一万円位はいちここのまだ。しかし誰も死なないでよかった。

黒沢の講習へは行かなんだ。花岡君に代講して貰ったが、開講式には訓辞を、祝典には祝辞を送った……光明を見て下さい……が、初から、涙の講習であったのと、誰からも誰からも皆「憶念の聖会」を感得したといつて来る。私のいない講習の第一回が行なわれたのであった。もし私が行ったら、あんな真創な涙の会座にはならず、会員もあるものを感得しなかつたでしょう。黒沢では憶念の聖会だとして最後まで有難い自粛されたものであったとのこと、み仏は悪いことをよくして下さることをしみじみ知らして頂きました。加計、小河内、広島、能美等から黒沢にゆきました。しかしこの会座のことは七月号の山本記を見て下さい。

この間、中井先生が多額の見舞金を持って葡萄糖六十本を持って見舞いに来てくれました。何よりも絹に「経済的なことで先生に心配かけてはいけない、困る時にはいつて下さい。」絹も泣いていたが、どうしても涙が出る。

「病みはて、そでに涙のかゝる時、人の心のおくぞ知らるゝ。」「おちぶれて」の改作で失敬、尊公も御同様であろう。人の誠の腸にしむ死の床だ。君の御説の通り元気な人の宗教話は修養論でしかない。死を見ながら静夜の光を仰ぐ、微笑、横超の御念仏、この点、長年のお育て誠に有難いことである。気を付けて生きてただけがのいのち、それが科学の私への宣告である。しかし、今こそ一番有難い。

早枝子が十四日に女子を安産した、すぐ絹家が行つてやつたが、五六日目に母子共に四十度の高熱でさわいだが、幸い助かった。二十一日絹、また、ひどうかほがゆがんだといつて帰つた。名は妙美と私がつけた。これは往生要集に「妙境界樂者四十八願莊嚴淨土一切万物窮美極妙所見悉是淨妙也」とあるよりつけたもの、ついにおじいちゃんになりました。

わかめをもうたから少しおくりします。高島のりも送りましょう。わかめはおそいからよくないが、この中、色は悪くても塩ぬきがおいしい。

病人の集団になつたので先きをおそれてペニシリンをたのんだが不用になりました。それでも一本送つてもらつたので、何べんも送金！しようとしたがどうもやれんでやめました。悪しからず御許しあれ。中井外科も保険かしらん県が何十万とかくれずにたまつているといつていた。「鮎にも〇〇万たまつているそうですよ」といつていた。全国の医者困つているとのこと。中井先生も鮎へ見舞にゆくといつすべし矣。私も元気になつたら鮎にゆく。今度からは酒はいらん。今日はこれでおきます。つる枝さんを休ませるように。さよなら

昭和二十四年五月二十四日 兄より

蘇晃君

(以下、前文と同封)

今頃御夕事には『歎異抄』の話である。二度とない一世一代の話である。今頃は第三章悪人正機章である。そこで第三章を読んで読みぬいて頂きたい。

本章で悪人とは、「他力をたのみたてまつる悪人」であつて、他力本願をたのみ人のこと、全体この章にはたのみというお言葉が三回もあつて、たのみぬ人が善人である。決して世間通俗の善悪で考えてはならぬ。他力をたのみぬ人、自力作善の人、それが善人である。法然門下も親鸞門下にも、この念仏に自力を持ち込む高僧が沢山というより皆といたがよい、今日でもそうかも知らない。一念義、多念義、西山、鎮西、諸行本願義と五流、皆何かの形で念仏に、定散心（雑修）定散二善（雑行）を持ちこんだ、その時代の波の中で、純粋な念仏を出そうとするのが『歎異抄』である。歴史的なことなのである。

「自力作善の人は他力をたのみどころかけたるあいだ弥陀の本願に非ず。」

文章だが、たのみぬ人は弥陀本願の世界の人にあらず、世界にあらず等、多くの意味を含めて、「非本願」と出したもの、たのみ悪人は本願の世界、たのみ善人は非本願の人。本願か。非本願か。二つに一つ。非本願の念仏者こそ世の俗眼俗耳をひきつけたのだ。實際生活となると何と人は皆、賢とよばれ善とよばれる声の嬉しいこと。観念的には念仏でも、生活は善人正機、おれの心がそうなのだ。

だが、脳溢血か、尿毒性か、心臓麻痺かめめて死のおれには、死ぬるは我一人、何もないのがおれ一人、おちるのもおれ一人、おちるのもおれ一人、それ故五劫思惟の願をよくく案ずれば夜晃一人がため、ええぞええぞ、煩惱の奴、高上りなりと、虚仮賢善なりと何のざまなとするがいい。そのまま南無阿弥陀仏の中だ……もうや5める一夕の法話さえとても書かれぬ。

二人の子供がかわいそうだ。大きい父ちゃんを忘れさせるなよ。

『要集』の極重悪人無他方便 唯称弥陀得生極楽、これがいつちええ書くこと。『要集』では唯称念仏、御本典は唯称弥陀。

## （二五六）

合掌 御手紙有難う。御無事で結構です。なかく御忙しいらしい。だが御無理のないように、急に過重労働をやつて病気をひきおこしては大変です。本部にも、十四日政治方に女子分娩、私が妙美と名をつけたが度々高熱を出すので昨二十五日も電報が来て絹はすぐ田尻に行つた。二十四日下岡氏帰団、山本君は目下、島、花田君は長旅から帰つたが今日又岡山の里へ母上の法事で帰省、鴨井流はいよく、太り、私の顔色は依然蒼い。鮎の蘇晃は元氣になり、鶴枝過労に倒れたとのこと。明日は栗栖の妻君、田植の手伝いに田舎にゆく。この人は夕の法話の時、必ず涙して聞く有難い存在である。

今頃は第三章を頂いている。「他力をたのみ」ということが三回あつて、歎異抄で、悪人とは他力をたのみぬ人のこと、善人とは自力作善の人、他力をたのみぬ人のこと、世間善悪のことではない、たのみぬ人は「弥陀の本願にあらず」とて非本願の人、本

願の世界と非本願の世界、観念的には本願の世界、実践的には非本願、わしがおれが、かしこいと言われ善人とよばれる方へ動いてゆく。他力をたのむ悪人とは二種深信。それ故悪人でも広大なる功德の持ち主、自力作善は雑行雑修の人、御名号に何か添えぬと足らぬ人、それは広大なる信に眼が開かないからである。別れ暮すともゆめ／＼御念仏を忘れて外に生き甲斐や善を見出すこと勿れ。

蘇晃の手紙の一節に言く、『光明』や『光輪』の旅愁抄を頂いて私は、病む兄さんから放たるゝものに、空々寂々のしゞまりと念仏の智慧の人生に於けるみ光に撰取されると共に、身会するのでなしに心会することを得しめられて有難く嬉しく御念仏申しております」とある。誠に身会せぬ弟は心会して念仏している。これは又同時にまざるのこともあろう。会えぬ日こそ真に会わせて頂くことこそ一番純粹であるかも知れぬ。さよなら

昭和二十四年五月二十六日 夜晃

松中まさる様

何事にも勇気を出さぬように。御念仏第一に道を取って歩むこと。如何に忙がしくても勤行の時には心会せしめられる。

(二五七)

合掌 皆様御変わりなく御精進で御座いましょうか。先日は黒沢の光善寺の講習にようこそ御出でになりました。定めし他では得られない尊いものを得てお帰りになつたことで御座いましょう。

おば様にも長い間お会いしませんがいよく御念仏で会わせて頂きました。これから多忙な時になりますが、仏前に長く坐つていらぬかはりに、田の中、畑の中で御念仏して下さい。登君のおくさんが沢山／＼聞いていられますから一緒に御讚嘆して念仏して下さい。仕事がすんだら本部へ出て下さい。

では御大事になさい。

昭和二十四年五月二十六日

本家の御二人様

夜晃